

お米とわたし

南島原市立布津中学校

三年

小西

海翔

なかなか起きられない朝に、僕は朝ごはんの食欲をそそる香りにつられてとび起きます。テーブルの上には、朝によって照らされ、きらきらと輝く真白なごはんとみそ汁、卵焼きがのっぺいしています。これが僕の大好きな、毎日の朝ごはんです。

まずは、ごはんを一口。甘い香りで口の中がどんどんと満されていきます。また、ごは

んをかむと、まるでフルーツでも食べているかのような甘さです。朝のねむたい時でも、ぺろりと食べ終わってしまいます。お母さんおかわりしとつい言ってしまうほどのおいしさです。

僕は小学生の時、あるお米に出会いました。それは、先生が友達の人からもらったと言っていたお米でした。先生はみんなに少しづつお米を分けてくれました。家でお母さんにその米を見せました。すると、お母さんはどこ

で作られたお米なのか聞いてきました。その  
 お米は東北の方の有名な所のお米と先生が教  
 えて下さったのです。小学生だった僕には、  
 とてもわかりませんでした。しかし母は、お  
 いしかお米のとれる方のやけんおいしかばい  
 と言って炊いてくれました。僕は、そんな変  
 わらんやろと思いつた。ごはんは少し口の  
 中に入れてました。すると、いつもとは違う濃  
 厚な味わいに、僕の手は一度も止まることを  
 せず、あゝという間に食べ終えてしまいました  
 た。おかわりと言いたい所でしたが、もうお  
 米はすべて食べましてしまいました。もう少  
 しゆっくり味わって食べればよかったなと食  
 べ終えた後に思いました。それから僕は、世  
 界中には食べたことのないお米はいっぱいあ  
 るから、どんな味がするのかわかんない色をし  
 ているのかわかりたいなと思うようになりまし  
 た。大人になつたら、自分で働いたお金で、  
 たくさんの種類のお米を食べてみたいと思ひ  
 ます。

ぼくはたまにお米をとぎます。ぼくは、そ  
 の時に聞こえるシャッがシャッという音が  
 気に入っています。その音を聞いていると何  
 もかもが忘れられ、スツキリします。おいし  
 くなれと思いつつ、自分で  
 いただきます。自分  
 いただきます。自分  
 いただきます。自分

ぼくは、のりと一緒にごはんを食べたい  
 ます。パリッとした食感と、ほどよい塩気が  
 甘くてモチモチしたごはんによく合います。

ごはんとのりが協力すれば、敵なしと言え  
 ほどのおいしさです。のりでごはんを巻き、  
 大きく口を開けて食べる。その口の中に入  
 た瞬間が、とっても最高です。

お米は、僕になくてはならない存在です。  
 幸せな時間をつくってくれます。いつも、あ  
 たり前のように食べているお米は、農家さん  
 達が一生懸命に作って下さっているから食べ  
 れます。自然に感謝し、人に感謝し、心をこ  
 めて、いただきます。ごちそうさまでした。

No. ....

No. ....

を  
言  
い  
、  
食  
べ  
て  
い  
き  
ま  
す  
。  
こ  
れ  
か  
ら  
も  
僕  
は  
お  
米  
を  
食  
べ  
続  
け  
ま  
す  
。